

令和4年度 自己評価書

領域	重点目標・具体的取組	達成状況・成果と課題	今後の改善方策	学校関係者評価を踏まえた今後の改善方策
学校運営	【数値目標 1 教務・学校管理システムの改修 3 件以上】⑧・・・10 件 達成 【数値目標 2 学級 学年閉鎖・臨時休業時等の時間割通りのオンライン授業実施 100％】⑩・・・100％ 達成 【数値目標 3 HP 更新回数 年 100 回以上】⑪・・・100％ 達成 【数値目標 4 会計事故ゼロ】⑫・・・0 件 達成		総務部 ⑫各種分掌に関わる資料（会計を中心に）のフォーマット化の整理と完成 教務部 ⑩学びの保障の拡充具合を測る指標の作成まで至ることができなかった。今後、多様な学びが求められる時代において、学びの保障がどのようになされるべきかの検討が必要である。 ①昨年度の科目履修案内冊子をブラッシュアップし、生徒へ提示する情報の精度を高めることができた。 研究部 ①多忙な業務と両立できる持続可能で効果的な校内研究体制の構築。具体的には、 a: IB校としての課題やSSH事業に関する課題について学校全体で体系的に検討できるような組織作り。 b: 他校研究会への参加をより積極的に促し、情報を共有する場を設け、本校の研究への活用を図る。 c：特別研究推進委員会で校内研究のコーディネートや調整をより機能的に進める。 広報・情報委員会 ⑪3年ぶりに学校説明会を対面で実施出来た。1回目の反省を踏まえ、2回目はより多くの方に学校をご覧いただけるよう工夫をした。臨時で行った3回目も、副校長先生方の協力のもと実施し、1.2回目にお越しいただけなかった方にも十分に門戸を開くことができた。授業ビデオの編集に時間がかかることが足かせとなっている。計画的に撮影を行い、長期期間中などを利用して編集作業を行えるように工夫する。また、対面でより多くの参加者を入れて学校説明会を実施していきたい。 IB委員会 他の多忙な業務と両立できる持続可能な形でIB教育モデル校を目指すという学校経営計画の重点目標を実現するために、 ・MYP・DPに関する協働設計の機会を確保（IB研修会だ	IB ・ SSH ・ユネスコ スクールとして特色ある教育に取り組み、企画立案・実践・評価・改善をおこなう。社会に開かれた教育課程を実現する。 NPO ・ NGO や教育団体等との外部連 携を深め、教育力の充実を図る。SSH については 3 期目 指定 を目指す。 学校予算の歳入の拡充と歳出の適正化 ・透明化を図る。本校の特色ある教育 情報 を積極的に発信し、外部資金獲得増を目指す。 ・主な分掌や委員会等にウェブ サイト担当者を配置し、定期的な学校HP 更新に努める。 ・学校説明会を校内外で 開催 し、受検生および保護者 ・生計維持者に正確な情報を届ける。 ・受検生などに学校を実
	◎①IB・SSH ・ユネスコ スクールとして特色ある教育に取り組み、企画立案・実践・評価・改善をおこなう。社会に開かれた教育課程を実現する。NPO・NGOや教育団体等との外部連携を深め、教育力の充実を図る。 ◎⑤学校予算の歳入の拡充と歳出の適正化・透明化を図る。外部資金導入の機会を増やす。 ⑧学校の抱える様々な課題を解決するため、校内組織・分掌や学校システムなどを改善する。 ◎⑩外的要因によって登校が困難となった時も学びの保障のできる体制の確立 ⑪学校経営計画、学校評価をはじめ学校教育活動の取り組みや適切な情報の「見える化」を行い、ウェブサイトをはじめとした諸媒体で公開・発信する。 ⑫予算の決定・執行において、常にその状況を管理し、計画的かつ合理的な運用をお	総務部 ⑫学年会計および帳簿管理のシステムを見直し、マニュアル化を継続した。退学者の会計処理に関する情報の整理・管理を進め、ファイル化した。 ⑫学年会計においては、主に退学者手続きに関する運用のシステム化がはかられた。学年費関連の資料のフォーマットの統一が徹底された。学期ごとのチェック体制や担任団への事前の声かけなどは実施された。しかし、前年度からの引き継ぎの点で資料の共有に不備があり、確認に時間を要した。 教務部 ⑩新型コロナウイルス感染症によって生じた学級閉鎖・学年閉鎖時の授業対応の集約と周知を、各学年教務を中心に実施できた。 ①科目履修案内を整備し、高等学校の新学習指導要領のカリキュラム・シラバスを前期課程の生徒に示せる形にした。また年間カリキュラムを年度当初に作成し、生徒・保護者と共有できる形にした。 ⑧年間行事予定の抜本的見直しをし、これまでと異なる構成を試みた。 ⑧学校システムWGと連携しながら、新システム移行およびそれに伴う不具合の洗い出しを行うことができた。 研究部 ①⑪『国際中等教育研究』第16号を発行した。 広報・情報委員会 ⑪学校広報について：対面で3回の学校説明会を実施した。パンフレットについては、修正を加えて作成した。動画の発信ができなかった。 Webページについて：Newsについては先生方の協力のおかげで多くの回数発信することができた。 GIGAスクールで購入したPCのメンテナンス方法、周知など、各々での管理がしやすいようにした。 大きくネットワークが停止することなく運用することができた。		

	こなうと共に、その透明性を確保し、説明責任を果たす。昨年度会計監査で指摘された決定権者の印洩れ執行については改善に向けて体制を確認する。	IB委員会 ①FLSが充実した（中国語・韓国朝鮮語に加えてフランス語・ドイツ語・マレー語も）。 ①研修教員や学校訪問者に対する情報公開（説明、授業公開等）、IBに関するインタビューやパネルディスカッション等の研究協力、IBコンソーシアム主催の説明会での発表等を行った。 国際教養委員会 ①各学年が「国際教養」の立案・実施に努めるとともに、今年度の実施記録を残して今後の体系化にむけて改善を図れるようにした。 ①「人間理解」講座・「理数探究」講座については、当該学年で実施、「国際理解」についてはフリー・ザ・チルドレン・ジャパンと協働して開発したプログラムを実施することができた。 ①ユネスコスクールの評価会に出席、ユネスコスクールの更新手続きを行うにあたって本校の実践の一部を外部に示した。 ①昨年度のクラウドファンディングで得た資金でSA活動などの一層の充実を図った。ほかに、校内研において、5月「国際教養について」、12月「課題研究モデレーション」、2月「ワークキャンプの検証と分析」を実施した。 サイエンス委員会 ①SSH事業計画計画に沿って次の活動を行った。 ・SS科目開発事業 ・SSIB講座開発事業 ・理数探究開発事業 ・課題研究推進プログラム(ISSチャレンジ)の開発と実施 ・評価方法開発事業 ・評価検証・広報活動 事業内容および成果を対外的に公表する（本校HP・研究開発報告書・生徒論文集など）。事業評価及び検証。公開研究会、情報交換会の企画及び実施 ・新科目理数探究実施に向けた最終検討 ・同窓会と連携し、生徒課題研究への卒業生の人材活用 ・スタディツアーの実施 グローバル委員会 ①目的と計画に沿って次の活動を行った。 ISSチャレンジ グローバル部門エントリー数68チーム ・昨年度の48チームに対し、今年度は20チーム増加した。3年前の2019年度は64チームであったことから、生徒のエントリー状況は、コロナ禍以前と同等まで回復してきたといえる。 ・昨年度のTeamsを引き継いで更新したことで、グローバル部門・サイエンス部門の生徒や担当教員とのやりとりの一本化による効率化をはかるとともに、過去の業務の流れや資料を確認しやすくなった。 ・公開研究会や学校説明会で、課題研究ポスターを展示し、生徒が来校者に対面で発表する機会を設けた。	けでなく）。 ・本校教員がIBEN業務やJob alike運営により積極的に関わって質を高めていけるような環境整備。 国際教養委員会 ①「国際教養講座」について今年度は3つの柱すべての実戦が行われ、各学年における「国際教養」の実施の実際を記録に残した。前期課程における「国際教養」の“コア・カリキュラム”が確定しつつあり、それをベースに後期課程の「国際教養」への連続性などを検討していく必要がある。 国内ワークキャンプにおけるプログラムの充実が図られており、国内ワークキャンプⅠではマイナーチェンジからの3度の実施をふまえて、次の3年に向けた検証を実施することができた。国内ワークキャンプⅡについても、今後の3年間を見据えたマイナーチェンジの議論を始めることができています。 「課題研究」に関して、その充実を図るために授業時間数の確保を提案し共有された。研究支援人材バンクなどの取り組みも始めているが、23年度から始まる「理数探究」との選択筆履修化などをふまえて、本校の課題研究のあり方を根本的に整理していく必要がある。今後は、課題研究に関する運営面等での整理と統合とともに、4年次からの流れを再構築・充実する必要がある。 SA活動含めてCOVID-19後を見据えた仕掛けが必要である。本校の「総合的な学習/探究の時間」への他校からの関心は大きい。成果等を積極的に外部に公開するとともに、本校の特徴的な教育の改善を図っていく手立てとする。 サイエンス委員会 昨年度の中間評価を受けて、改善すべき点については取り組んだ。今年度はスタディツアーを実施することができた。第2期での取り組みについて、計画した事業を滞りなく実施することができた。第3期申請に向けて、SSH研究開発事業に全校的に取り組むための環境とシステム構築が改善課題である。来年度は第2期の総括を踏まえて、第3期申請のためのグランドデザインの具体化が必要となる。 グローバル委員会 ・課題研究の評価のモデリングを今年度も行ったが、引き続き教員間での共通理解を深める必要がある。 ・コロナ禍の規制が緩和されてきて、対面の研修や交流の機会が増えてきたが、海外研修に関してはオンラインにとどまったので、実施のあり方を模索したい。	際に見てもらう機会をつくる。 予算の決定・執行において、常にその状況を管理し、計画的かつ合理的な運用をおこなうと共に、その透明性を確保し、説明責任を果たす。 昨年度会計監査で指摘された学校預り金額の適正化については重点的に改善する。 ・外部評価や学びの確認アンケートを教育活動の改善に生かす。
--	---	---	--	---

		・ISSチャレンジ課題研究発表会を対面で開催した。 Global Café ・年4回のGlobal Caféを対面で開催した。うち1回はオンラインで海外の生徒との交流も含んだ。 ・TOUR DE FOODチームによる年2回のフードドライブを実施した。 国内交流（国内からの来校・視察含む） ・オンラインで、信州WWL高校生国際会議（長野県上田高等学校主催）、アジア・オセアニア高校生フォーラム（和歌山県教育委員会主催）、全国高校生フォーラム（文科省、筑波大学主催）に参加した。 ・対面で、「世界津波の日」2022 高校生サミットin 新潟（新潟県他主催）、全日本高校模擬国連大会本選（グローバル・クラスルーム日本協会主催）に参加した。 ・大阪清教学園高等学校1年生と本校5年生との研究交流会、静岡城北高等学校と本校4～5年生との研究交流会を、本校会場で開催した。 海外交流の実施 ・オンラインで、UCL Japan Youth Challenge（UCL主催）、Youth Global Connector交流会（ピーエムグローバル主催）に参加した。	・Global Caféや外部評価会などで、学年を超えて学ぶ機会や、卒業生と在校生をつなぐ機会は設けられたが、今後もより有意義な形でつながりを形成していけるようにしたい。 ・評価の時期や規準の見直しとともに教員の指導力向上を図り、生徒の研究成果が評価されることによって学校全体の研究活動の活性化につなげていく必要がある。 ・サイエンス委員会との協働による、ISSチャレンジ研究成果発表会などの業務効率化 ・海外研修に関しては、円安や物価高騰の影響もあり、コロナ禍以前と同じ研修を現在行おうとすると費用が高くなりすぎるため、行先や日程を再検討し、新たな形の海外研修を模索していく	
教育活動	【数値目標5 学びの確認アンケート 年2回実施】⑳・・・2回 達成 【数値目標6 SBCDE 調査等 による カリキュラム評価 年 1回以上】㉑・・・1回 達成 【数値目標7 評価に関する ミス ゼロ】㉒・・・38件 未達成 【数値目標8 学問的誠実性の事故ゼロ】㉓・・・4件 未達成 【数値目標9 DPフルディプロマ取得 100%】㉔・・・100% 達成 【数値目標10 推薦入試・海外入試・奨学金出願における重複出願事故 ゼロ】㉕・・・0件 達成 【数値目標11 校内クラスター感染ゼロ、いじめ 重大事態 ゼロ 貴重品盗難ゼロ】㉖ 感染拡大防止のための学級閉鎖3件、いじめ重大事態0件、貴重品盗難0件・・・未達成		教務部 ㉙シラバス・カリキュラムの理解が徹底されていない教科もあり、周知が必要であるとともに、今ある科目履修案内等内で整合性をつけられるようなチェック体制が必要である。 ㉚成績処理に対して余裕を持たせる年間行事予定を作成することができたので、それが運用する中でより効果的にはたらくよう周知および改善の検討が必要である。	IB プログラム評価で指摘された要検討項目を改善する。大学のリーダーシップのもと、DPの要改善項目解決に向けて、選択科目の充実への方策を検討し、その実現を図る。生徒主体の活動を基本に、安全安心な活動を推進・支援する。スポフェス、スクフェス、ワークキャン プ等の行事実施のノウハウの継承を確実にできるようにする。R6年度の海外WC再開に向けて準備を進める。評価の観点と基準を明確に提示し、生徒が自己の学習状況を把握し、学習意欲の啓発に繋がる支援をおこなう。生徒保護者 生計維持者の信頼を失う成績処理・評定算出のミスをなくす。リモート授業の充実を図り、よりレジリエントな体制づくりを目指す。学問的誠実性の指
	㉛自らの教育活動や学校運営について、数値目標を設定するなど目指すべき目標を明らかにして、その達成状況や達成に向けた取り組みの適切さ等について評価し、組織的継続的な改善を図る。生徒による授業評価（学びの確認アンケート）を実施する。 ◎㉜新学習指導要領・IBの教育原理を踏まえた教育課程を実施する。 ◎㉝SSH事業の推進と研究開発を全校的に加速する。 ㉞IBプログラム評価で指摘さ	教務部 ㉙科目履修案内を整備し、高等学校の新学習指導要領のカリキュラム・シラバスを前期課程の生徒に示せる形にした。また年間カリキュラムを年度当初に作成し、生徒・保護者と共有できる形にした。 ㉚成績訂正の種類は昨年度よりも減らすことができた。 ㉛今年度中に教務内規・運用規則の課題に対する対案をつくるまでに至らなかった。 進路指導部 ㉜大学、附属高校とも連携を図り実施した。 ㉝㉞海外大学進学者を夏休み前に招いて「卒業生を囲む会」を実施した。その他複数回にわたって卒業生に依頼し、対面／オンラインで海外大学進学のための助言やサポートを得る会を実施した。 推薦書の書き方ワークショップを開催するとともに、推薦書の翻訳について外注も視野に入れて検討し、実際にサンプルとして発注した。 ㉞㉟進路指導関連の行事の多くを対面で実施することができた。一方で	進路指導部 ㉞㉟大学模擬授業については、生徒に事前に提供する情報を詳細にし、講義内容や大学名がわかるものとする事で、講義に臨む生徒の事前の心構えができるようにする。 特別入試の校内選考日程を改訂したため、その効果や影響を見取る。 カリキュラム委員会 ㉙㉚新たなカリキュラムに対応する特例校申請は2024年度まで必要となるため、次年度以降もカリキュラムの進行が滞ることのないよう対応する。 導入当初の目標であった専任教員によるイマージョン授業・科目の実施があまりできていない現状を踏まえ、特に5・6年生での	

	れた要検討項目を改善する。 ②④評価の観点と基準を明確に提示し、生徒が自己の学習状況を把握し、学習意欲の啓発に繋がる支援をおこなう。生徒保護者 生計維持者の信頼を失う成績処理・評定算出のミスをなくす。 ②⑥学問的誠実性の指導を徹底する。リモート授業の質的向上に努める。 ◎②⑧ 北米・欧州・アジアオセアニアの海外大指導力の組織的強化と奨学金獲得支援。 ②⑨国内外入試および奨学金指導などにおいて、制度上認められない重複出願事故を防ぐ。 ③③学校生活上のルールとマナーを確立する。コロナのため指導の機会が減った美化活動指導の強化。学問的誠実性も生徒指導の問題としても扱う。	対面型での準備はオンラインに比して負担となることもあるため、その体系化（マニュアル化）と合理化が必要となることがわかった。 生徒・保護者にむけて、進路指導部および学年担任を中心に進路情報を提供した。今後は6年一貫した進路指導のビジョンを、学年を超えて共有する必要がある。 模試の成績と校内成績の分析・検討は、学年任せになってしまい、進路指導部として十分な検討はできなかった。今年度末からはベネッセに大学の合否情報を提供し、外部業者の力を借りて分析を行うことで、翌年度以降の進路指導に生かせるよう情報収集と整理を行っていく。 大学入試説明会実施後、法政大学から生徒の聴講態度についてクレームを受けた。 海外進学については、関係者が情報共有する会議を定期的に設定し、細かな情報を共有することができた。また進路指導部と海外進学アドバイザーの役割の区分の明確化に着手した。高大接続や指定校推薦をはじめ、校内選考を必要とする特別入試や奨学金申請者の選考を概ね手順通りに実施できた。ただし、学年で伝達していた校内締切に一部誤記が生じ、校内選考日をずらさねばならない事態が第3回の校内選考にて生じた。調査書の誤記や不備等がいくつか生じ、大学から連絡を受けた。 カリキュラム委員会 ①⑨管理職とサイエンス委員会と連携しながら特例校申請を行えた。 非常勤講師に頼っている継続的な担当者の確保は困難であり、専任教員が担当者になるようイメージ実施各教科への働きかけを今後も継続していく必要がある。 ②④後期課程の観点別評価は職員会議で各教科に注意喚起をした効果があった。DP科目と新指導要領上の科目との対応関係を確認し、みなしおよび対応関係を持たせる科目を適切に設定したことで、来年度以降の負担軽減につなげることができた。 IB委員会 ②④DPの評価や成果物のIBISへの提出に関して、複数で確認しながら誤りなく処理できた。 国際教養委員会 ①⑨「総合的な探究の時間」における記述評価に取り組んだ。	開講の必要性、外国語科や国際A・Bへの整理統合などを含め今後検討する必要がある。 IB委員会 ②④DPの評価や成果物のIBISへの提出に関して、複数で確認しながら誤りなく処理できた。次年度も継続して処理を行う。 国際教養委員会 ①⑨「総合的な探究の時間」における記述評価に取り組んだ。次年度も継続して実施する。	導を徹底する。 Chat GPT DeepLをはじめとする 生成系 AI の活用制限について検討する。 。国内外入試および奨学金指導などにおいて、制度上認められない重複出願事故を防ぐ。 ・安全安心な学習環境の維持、様々な文化的 ・社会 経済 的背景 そ その他の要因から起こる困難を抱える生徒への理解とカウンセリング ・マインドを生かした対応ならびに指導。 保健室の役割の明確化と共通理解の推進。 AED 講習会・ エビペン講習会の実施。 ・学校生活上のルールとマナーを確立する。 美化活動指導の強化。 学問的誠実性 も生徒指導の問題としても扱う。
研究活動	【数値目標 12 個人研究費の予算消化 100%（年度当初から希望しないものを除く）】③⑤・・・84% 未達成 ◎③④IB・SSHに全教員が積極的に取り組むとともに、校内研修会や教科会の内容を充実させ、教科横断的分野（IDU）を活発にする。 ◎③⑤ IB 校に勤務する教員と	研究部 ③④⑤昨年度各種アンケート結果の分析をふまえ、研究グループの構成を見直し、学年グループ以外にも教科や教育課題によるグループも設定した。 ③④⑤第8回公開研究会を対面にて開催した（全体提案と卒業生座談会は事前動画公開）。 ③④⑤特別研究推進委員会でSSH事業に関して共有し、今後の課題について検討した。	研究部 ③④⑤多忙な業務と両立できる持続可能で効果的な校内研究体制の構築。具体的には、 a: IB校としての課題やSSH事業に関する課題について学校全体で体系的に検討できるような組織作り。 b: 他校研究会への参加をより積極的に促し、情報を共有する場を設け、本校の研究への活用を図る。 c：特別研究推進委員会で校内研究のコーディネートや調整をより機能的に進める。 IB委員会 ③④⑤次年度も事業計画に沿った活動を行う。	IB ・ SSH に全教員が積極的に取り組むとともに、校内研修会や教科会の内容を充実させ、教科横断的分野（を）を活発にする。外部資金を獲得しての共同研究を促進する。 大学・研究機関との連携を通じて専門性の高い教育実践および教育研究をおこなう。附属学校運営部と連携の

	して生徒ニーズを踏まえた質の高い授業を展開し、積極的に授業評価をおこなう。採用1年目の教員が授業を計画的に参観する取組みを行う。	③④校内研究会等でIB校としての課題について共有した。 IB委員会 ③PPモデレーションやIB研修会でMYPに関わる課題を共有し改善を図った。 ③研修教員や学校訪問者に対する情報公開（説明、授業公開等）、IBに関するインタビューやパネルディスカッション等の研究協力、IBコンソーシアム主催の説明会での発表等を行った。 サイエンス委員会 ③昨年度の中間評価を受けて、改善すべき点については取り組んだ。今年度はスタディツアーを実施することができた。第2期での取り組みについて、計画した事業を滞りなく実施することができた。	サイエンス委員会 ③第3期申請に向けて、SSH研究開発事業に全校的に取り組むための環境とシステム構築が改善課題である。来年度は第2期の総括を踏まえて、第3期申請のためのグランドデザインの具体化が必要となる。	上、大学教員の本校授業への長期支援について検討する。東京学芸大学 Explayground のラボ活動の本校への適用については情報を集め精査する。
学生の教育・支援活動	◎③⑨授業参観や教職大学院IB研修・教職専門実習生を積極的に受け入れる。	研究部 ③⑨特別研究推進委員会にて研究協力依頼に関するガイドラインを修正し、公開した。	研究部 ③⑨研究協力依頼に関するガイドラインに沿って研究協力を行う。	授業参観や教職大学院IB研修や教職専門実習生を積極的に受け入れる。大学で新規に開設された授業科目「自己創造のための教育体験活動」（学生ボランティア派遣）に協力する。
社会貢献活動	◎④③IB校として、また現職教員研修の場として学校見学や研修のための学校訪問を積極的に受け入れ、必要な情報提供をおこなう。大学・政府自治体等公的機関から申し入れのあった授業研究を中心とした短中長期の研修生を、校務に支障をきたさない範囲で受け入れる。	④③高知県教育委員会から2名の現職教員を1年間のIB研修として、鳥取県教育委員会から2名の現職教員を1週間のIB研修として受け入れた。また、年間を通して随時教育機関等からの視察を受け入れ、IB導入に関する相談に乗った。	④③次年度も校務に支障をきたさない範囲で研修を受け入れる。	IB校として、また現職教員研修の場として学校見学や研修のための学校訪問を積極的に受け入れ、必要な情報提供をおこなう。大学・政府自治体等公的機関から申し入れのあった授業研究を中心とした研修会を、校務に支障をきたさない範囲で実施協力する。

その他特記事項

特になし

開催日：令和5年3月9日